

Litaracy

まちのミカタ

Recommendation

01 "無い"ことのすばらしさが"ある" 額田地区に魅せられて。

額田を知ろう！ イベント 「観光から感動へ」 in りぶらまつり2011

日 時：11月12日(土) 18:00~20:00
場 所：りぶらホール
レビュー：三矢 勝司(りた)



額田町が岡崎市に編入合併して5年が経ちますが、未だ「岡崎市内」という感覚が滲み出てこないのは僕だけでしょうか。岡崎市内全域を対象とするまちづくり支援を考えている私たち、りたとして「もっと額田のことを知らなければ！」という思いから、今年のりぶらまつり1のプログラムとして「額田を知ろう！」という趣旨のイベントを開催することにしました。

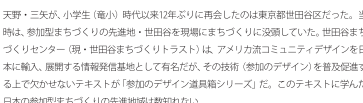
これまで、額田の方のお話を聞き、実際に現地に行ってみて分かったことは「無いことの素晴らしさが、額田にはある！」「無いからこそ自分でつくる、自分でつくることの喜びがある」ということです。テーマパークのような便利でお気楽な楽しさでは無いけれども、いかめしかまほほと自分の内側から湧き出してくる地区・額田。そんな思いを込めて「観光から感動へ」をテーマに企画を進めています。

当日は、地元・額田で活動されている方、他所から入っていらっしゃる方に参加していただき、額田の魅力や歴史、額田の食文化も堪能。来場者には先着250名様に「額田魅力写真集」をプレゼント！という充実ぶりです。

りぶらまつり2011の日目録は、額田イベントに決まりましたね。(※この企画は、岡崎青年会議所の協賛と一緒に進めています)

01 日本における参加型 まちづくり普及の立役者。

「参加のデザイン道具箱」
著 者：世田谷トラストまちづくり (旧 世田谷まちづくりセンター)
定 価：各号3,500円
レビュー：三矢 勝司(りた)



天野・三矢が、小学生(亀小)時代以来12年ぶりに再会したのは東京都世田谷区だった。当時は、参加型まちづくりの先進地、世田谷を現地にまちづくりに没頭していた。世田谷まちづくりセンター(現・世田谷まちづくりトラスト)は、アメリカ流コミュニティデザインを日本に輸入、展開する情報発信基地として有名だが、その技術(参加のデザイン)を普及促進する上で欠かせないテキストが「参加のデザイン道具箱シリーズ」だ。このテキストに学んだ日本の参加型まちづくりの先進地は数知れない。

01 環境共生の社会を目指す 様々な取組を知ろう。

「JST社会技術開発センター(RISTEX)」「自然エネルギー研究センター(NERC)」
サイト：http://www.ristex.jp/env/ (RISTEX「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」)
http://www.nerc-hokkaido.co.jp/ (NERC)
レビュー：深谷 紗季(りた)

電力供給をはじめ、当たり前のようにならなくなった生活インフラのあり方について、私たちはあらためて東日本大震災を機に考えさせられることとなりました。しかし、考えただけではわからない、自分が何をするべきかわからない、という方もたくさんいらっしゃると思います。私もその一人です。私は大きなもの、見えないものへの依存から抜け出すことが大事なのではと感じています。それは悪徳を被る生活者自身が、自分で取り巻く環境をつくっていくことと同意です。状況の変化や自由意思によって柔軟に選択できるだけでなく、その選択に責任を持つことで、私たちは未来にツケを残さない生き方ができるのではないのでしょうか。なかなか一定の決断にはたどり着けません。でも世界にはどんな可能性があるのか？どこにどんな課題があるのか？まずは「知る」ところから私なりに解決策を探っていきたいと考えています。ここに紹介する二つの研究機関のサイトは、最先端の取組がわかるほか、これからの地域社会についての調子が充実していますので、そこらみなさんが次のアクションをする際のヒントに、少しでもなれば幸いです。

02 もう原発反対とは言わない 誰のせいにもせず 未来の子どもたちに、おいしいお米を してほしい海の幸を 与えられるように

「6paper」
発行：Candle JUNE
編集：6paper
価格：無料(フリーペーパー)
レビュー：山田 高広(りた)

このフリーペーパーは、反でも非でも脱原発でもなく、未来の子どもたちに私たちが遺していくこと、「子どもたちが自ら選ぶことのできる選択をつくっていくこと」の大切さを伝えてくれます。限られた土地で世代間でも安全に暮らすために、もう一度改めて「原発について知ること」「原発に必要ないエネルギーについて知ること」、「日本の文化、豊かな暮らしを再考すること」がわかりやすく図解付きで載っています。ペーパーの中に、消費者である私たちが購入する電力(水力、火力、バイオマスなど)を選ぶことによって、原発を支える資金を私たち自身が出さないという選択ができることと知りませんでした。今の日本はどうでしょうか？自分たちが支払っているお金が、実は反対している原発に使われている可能性があります。自分はそのもと、何のエネルギーかを購入しているのをご存知ですか？また、地域で発電した電気を地域で使うことで、今まで電力会社に払っていたお金の全てを地域に留めるという「エネルギーとお金の地域地産」が成立します。こういったことを実現していくためには、乗り越えなければならぬハードルがいっぱいあります。電気の供給も必要です。でも、どうせ使うなら、気持ち良く使いたい！美しい。将来子どもたちに「あの人は何をやってたんだ」と言われるよりは、「あの人が歴史を変えてくれた」と感謝されたらいい。メッセージ性も強く、デザイン性も良く、クリエイティブの高いフリーペーパー。

ID_000054

テーマ： 「社会的起業 としての“りた”」

最近では「コミュニティビジネス」や「ソーシャルビジネス」といったキーワードが、社会を賑わしている。これに関連して、政府(内閣府)が主導して、社会的事業の担い手養成に関する仕掛けが展開しており、愛知県でも関連するセミナーや研修、講演会の案内に遭遇する事が少なくない。こうした社会的事業の担い手の先導役として「りた」が取り上げられることも度々あり、筆者・三矢は「社会的起業を成し遂げた人物」として講演をする機会に恵まれることがある。

「利潤を拡大することを目指す営利組織」「社会の実現に向けて組織(団体)を設立し、資金調達を行なうから雇用を創出し、継続的に事業実施を行える仕組みをつくりあげる点に特徴がある。

「利潤を拡大することを目指す営利組織」「社会の実現に向けて組織(団体)を設立し、資金調達を行なうから雇用を創出し、継続的に事業実施を行える仕組みをつくりあげる点に特徴がある。

「りた」の組織母体(体の源流)は、1996年に設立された「岡崎まちづくり市民公社(総代会を初めとした岡崎市内の地域団体のネット

ワーク組織)であるが、りたの運動母体(心の源流)は、1999年に設立された「岡崎(CDC)研究会」といえる(詳細は、ブックレット「2まちづくりNPOと公共施設の指定管理」を参照)。1999年当時、二人の若者(天野、三矢、いずれも20代)が立ち上げた社会的起業の現場には、次の社会的課題があった。第一に「イオンショッピングセンター開発をめぐる市民と企業の対立」、第二に「住民参加のまちづくりが未熟な岡崎」である。

前者は、巨大商業施設の開発にあたり、近隣住民による住環境保全(環境悪化を食い止める)運動が巻き起こっており、企業との緊張感ある関係が立ち現れていた。岡崎(CDC)研究会は、この企業と住民との対立を成立させるべく奔走した。それは「自分達の住環境を自分で守り、育てていく」、いわば市民自治の実践を支える現場であった。

後者は、公共施設整備において、住民参加の場が無いことで「愛着のない建物」づくりが進行していた。岡崎(CDC)研究会は、二人(天野、三矢)が学生時代に学んだ「住民参加のまちづくりの技術(コミュニティデザイン)」や経験を活用して「住民と行政が共に協働をしながら、奈良井公園の改修計画を取りもめる活動」(岡崎で最初の本格的ワークショップ手法の導入)を展開した。この活動の積み重ねは「住民参加のまちづくりが未熟な岡崎」からの脱却を促す現場であった。



三矢勝司 KATSUSHI MITSUYA
NPO法人岡崎まちづくりセンター・りた事務局長

りたの源流には社会的起業に必要な「社会的課題」があり、そこに立ち向かうとする「社会的起業家精神の発露」があった。その歴史をひもとけば「対話と協働の現場」の創出こそ、りたの原点であり真骨頂である。

「りた」の取り組みにより、市民は変わったか？とする問題提起は、牧野氏(東京大学大学院教育学研究科教授)によってもたらされた。ここから多くの気づきを得られたことに対し、紙面上ではあるが、ここに記して感謝の意を表したい。

Litaracy

EVENT SCHEDULE

11 November		12 December	
12	10:00 土 20:00	3	10:30 土 15:00
13	10:00 日 17:00	4	日
19	14:00 土 17:00	10	13:30 土 16:00
19	10:00 土	17	10:00 土 13:00
23	13:00 水 16:00	18	10:00 日 13:00
26	10:00 土 15:00	11/26	09:30 土 12:00 土 15:30
		11/27	09:30 土 12:00 土 15:30
		12/10	09:30 土 12:00 土 15:30
		12/11	09:30 土 12:00 土 15:30

あなたに伝えたい。市民活動の魅力を再発見
りぶらまつり2011
りぶら全館がまつりづくりにぎわう二日間。今年は世界初のまちづくり「さくら村」がまつり最大に盛り込まれる。当日は選考が予想されるため、公共交通機関での来場がオススメ。
■無料(一部有料) ■岡崎市図書館交流プラザ・Libra
■りぶらサポートクラブ事務局
E-mail: info@libra-se.jp

やはぜの「元気の源」を見に来ませんか？
やはざかん第3回地域活動交流会
矢作地区の総代会をはじめ、各種分野で活動する地域活動団体や日頃の活動を報告し合い、交流を図ります。
■無料(どなたでもご参加いただけます)
■やはざかん 2階 ホール
■西部地域交流センターやはざかん TEL:0564-33-3665

大人も子どもも楽しめるくげい祭
ZEMANJO がくげい祭
それぞれの一言、ことばも大人までワクワクしむ「がくげい祭」。今年も、なつかりの学校のように、園芸、読書、絵画、楽器、神楽の時間…など時間割を作った、各種体験やワークショップ、コンサートを行います！
■無料(物産や飲食は有料) ■千両町小学校
■ZEMANJO(くげい祭実行委員会) ■じぶんじの会
080-3471-3654(つちん会)
http://www.coloblog.jp/blog/zenan/jogakugaisai/

第2回上地学区老人クラブ交流会
明るく活気ある地域のために、よりなでは幅広い層の方がイベントでもお楽しみしています。今年2回目の進行する今回は、交流をメインに、マジックの体験も進めます。
■よりなん 第6活動室
■西部地域交流センター・よりなん TEL:0564-59-3600

知られざる昭和レトロのまち並みと緑地を堪能しよう
松尾寺横丁にぎわい市
かつて花街としてにぎわった松本町。まるで昭和レトロタイムスリッとしたような路地裏に茶屋、松尾寺の境内を舞台に、地域のユアな市民団体、若手クリエイターによる飲食・物産ブースが集まります。(雨天決行。駐車場は無料です。)
■無料(物産や飲食は有料) ■松尾寺(松本町42)
■松尾寺横丁にぎわいプロジェクト
■松尾寺 TEL:0564-22-8663

紅葉を愛でもよし、地元産物に舌鼓を打つもよし
くらがり深谷紅葉まつり 地元産物まんぷくイベント
11/19~12/4の期間中、土日にはイベントも盛りだくさんです。この二日は地元産物まんぷくイベントが開催され、地元産物や物産も盛りだくさんです。(雨天時は変更または中止)
■無料(物産や飲食は有料) ■くらがり深谷第1駐車場
■岡崎市役所経済振興部観光課 TEL:0564-23-0384

「ハッ笑」を考へる思いの地
第3回 悠紀の里 市民検討会議
基本設計がまとまった「悠紀の里」。今回は、ハッ笑の歴史や文化の伝承を目的に設置される展示室が、どんな展示や仕掛けがあった人が足元を踏んでくれるかを考へます。
■無料 ■六ヶ野学区市民ホール(予定) ■60名
■岡崎教育委員会社会教育課 TEL:0564-22-6653

みんなで遊ぼう。楽しいクリスマス。
読み聞かせ・ミニコンサート・無料体験などを開催します。楽しいクリスマスと一緒に遊ぼうませんか？
やはざかん
17 10:00
土 13:00
よりなん
18 10:00
日 13:00

「よむなん」みんなで楽しむクリスマス
■無料 ■よりなん
■西部地域交流センター・よりなん TEL:0564-59-3600

街でワクワクするビジネス学でみませんか？
ソーシャルビジネス・コミュニティビジネス抽出セミナー
まちシゴト 社会起業家のススメ
①「韓国ソニマサン・マウルの実践に学ぶ」
②「街のブランドデザインを考へる」
③「続くビジネス・起業家の秘訣」
④「ふれないうちが社会を変える」
⑤「キッチンサイズの起業のススメ」
⑥「地域ニーズに応えた事業づくり、街づくり」
⑦「人を活かして、街や組織がもっと輝く！」
⑧「街でワクワクするビジネスプランを生み出そう」
参加ご希望の方は、メールにて必要事項(名前/所属/連絡先)をご記入の上、東海大手企業数々までお申し込みください。
■無料 ■2名(先着順) ■岡崎市福祉社会福祉センター
■東海大手企業数々事務局 TEL:0564-218-2526
E-mail: info@tokai-entre.jp

まちづくりの「Why」と「How」

Theme 1

「想いを重ね、形にする 私とまちをつなげる未来へ」

りたの挑戦と展望

NPO法人岡崎まち育てセンター・りたが誕生するきっかけとなったまちづくりのムーブメントは、岡崎出身の若者二人が東京で偶然出会ったことから始まる。その物語は「Litarcy4月号」において既に紹介済みなのでここでは割愛するが、りたが法人として誕生して以来、今年で5年を迎えることができた。この5年間、りたは岡崎で「自分達のまちを自分達で守り、育む」という「市民自治」促進のため、「公共空間のデザインワークショップ」「次世代の担い手づくり」「地域資源を活かしたまち育て」に取り組んできた。ほんの一部であるが写真を中心にその取組を紹介すると共に、将来の岡崎を見据えたこれからのりたの展望もご紹介したい。社会情勢の変化に応じて私たちの取組もさまざまな広がりや変容を見せたが、これまでもこれからも常に自分達に関わる「りたの取組により市民は変わったか？ まちは変わったか？」ということである。(編集：深谷)

写真で見るとりたのあゆみ



先代が築き上げてきたもの
現在(いま)はなくなってしまったもの
現在も残されているもの
私たちが、未来に遺していくもの
「私とまちをつなげる」をこれから考えよう。

思いは今から12年前、「公園のデザインをみんなで考えて提案しよう」と岡崎で初めてのワークショップを開催した時、参加された方々が「そんなことできるの!」「デザインするのって楽しい!」と、驚きと喜びを口にされていたことが脳裏に浮かぶ。僕らの動機は、公園を、道路を、まちを計画・デザインする自由と責任を、またそれを共に暮らす人々と共有することの必要性を伝えたい!ということだった。

りたの目指すまちの姿

りたの活動を振り返れば、自分たちのまちの将来像を語り合う場の創出と、市民が思いを具現化するための支援に奔走する5年間だった。これからは、今はまだ存在している個々の活動を結びつけ、人々が思い描いたまちの将来像を、自分たちで実現していくための仕組みの構築が急務である。それは、言い換えれば、「まちを良くすることが自分のためになる」という価値観と利害を共有する「社会(地域)資源共同利」の確立を意味する。まちの利益と自分の利益を線で

つなげ、地域に暮らす一人ひとりの出席とやりがいのある地域に向けられている、という社会こそが、りたの目指す50年後のまちの姿である。

説明会を開いたときには、「自分たちの道路」をなぜ通れなくするのか? という声があがった。

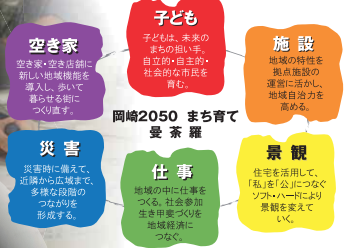
- 矢作の伝統行事の際に、昔から国道道を通行禁止にして、歩行者天国にしているが、年々時間と距離を短くするという指導が厳しくなっている。それも市民の苦情があるから国道一号线が隣を通過して、地元の人はお祭りに参加するので、苦情を出すとしたら、抜けば道に国道を使う。地域の伝統行事のための利用と、抜け道利用と、どちらを優先すべきなのか。
- 私益と公益の対立は、難しい問題。私益と言っても、住んでいる人が優先されるべきこともある。
- 最近では、市民の苦情でボール遊びが禁止されている公園もある。遊具も怪我をしにくくかわりに面白みに欠けるものが増えていっている。一方で、田舎谷の「冒険遊び場(プレイパーク)」では、怪我をしても自己責任、その代わり遊びの自由がほしい、と行政と市民が協定を結ぶ形で、プレイヤーという大人が見守りつつ、火遊びやターザンロープ、小屋を作ったり、子どもも大人も目を輝かせながら遊びに夢中になっている。
- 「町が上がる」という意識を変えないと、「施設がまちを変えよう」という活動につながらない。
- 施設の管理権限をもらって、自分たちで自由に使える場所を作っていく。

Theme 2

「2050年の岡崎に向けて」

あなたは未来に負債を残しますか? 財産を遺しますか?

2011年10月22日。NPO法人岡崎まち育てセンター・りた設立5周年記念イベントが開催された。そこにおいて2050年の岡崎を見据えた問題解決策を、6つの視点から考えざっばらんに語り合った。社会変化が急速に進む未来の岡崎へ、負債ではなく財産を残すために私たちは何をすべきか? 岡崎の未来を考える仲間56名が参加し、議論した。そして導かれた提案について、りたができるまちづくりとは? (編集：深谷) ※意見を抜粋し掲載



2. 防災からまちをかえる。

- 災害が起こる前にすべきこと(未然に防ぐこと)と起ったあとの対応は全く異なるので、別々考えるべきである。
- 兵庫県南部地震の際の淡路島の北淡地域の事例を参考に考えたい。[事例] 断層が通っており、激しい揺れに見舞われた断層であったが、①日頃から「地震計」はプロバンの検査をすくなく続けるなど注意喚起が行き渡っており、実際に地震が発生した時に行動が取れた②地域のコミュニティができていたため、安否確認がスムーズに行えたなどの理由で、人身被害が少なかつた。このことから、防災の基礎が地域のコミュニティ作りであることが分かる。
- 商店街の消失が地域コミュニティの消失につながり、地域防災の意識の低下に繋がっている。まずは、商店街を活性化させ日頃の顔の見える間わりを復活させることが必要。
- 市の一斉防災訓練が地域の防災訓練へと移行されたが、町内の訓練では参加者が少なく、実際に災害が起こった時の動きが不明確。まず、役員の方だけでなく若い人も参加してもらうように努めることと、地域としての動きを再確認することから始めなければならない。
- よほど年に1回地域との合同防災訓練を行うが、役員の方の参加がほとんどである。
- 小学校の保護者同士(主に母親)は顔見知りであるため、そこから地域のつながりが広がっていくようにしていくことが近道ではないか。昔の婦人会のようなつながりを復活させるべき。
- 災害時には広範囲ではなく、「〇〇のあたりが浸水している」などの生の情報が重要。地域交流センターがそういう情報拠点であったり、りたがその体制を作ってくれるとありがたい。
- 情報を流す側と受ける側の意識の違いを埋めることも重要。風水害など予兆がある場合は、各自がアンテナを振る意識がなければ、いくら詳しい情報を発信しても情報は伝わらない。
- 今日のような雑談交りして語り合う座談会のような機会が一番必要なのかもしれない。災害のためには、近所のいろいろな方と語り合う場があり、その中の話の一つとして防災の話があがれば、抵抗なくお互い意識を高められると思われ。

3. 仕事からまちをかえる。

- 地域文化を壊れさせないためにタウン誌で情報発信しているが、経済的には厳しいのが現実。地域の方が歩いて生活できたら、車がない人も外に出られるし、地域の実情が目に入ってくることで地域への関心が高まるのでは?
- 20代、30代が金儲けではなく、志で生きていけるような社会にしたい。
- 憧れや夢を若い世代に発信する必要がある。
- コミュニティで生活インフラをまかないたい。例えば電力会社を地域で運営し、利益をまちづくりに使うなどどうだろうか。
- 水車の石垣が美しい地域がある。これを観光資源もかねて発電に利用したらどうか。郡上などでは水力発電の成功事例がある。
- 社会資本である定年世代は結構引きこもっている人がいる。彼らをどう外に出すか課題。
- その世は楽しんでいなくて外に出て行くというところに抵抗があるのではないかと。だから稼ぐために外に出て行くことならよいのでは?
- 町内会をNPOにしようか、という話があったが、今のところどうもやらない。
- 内需を高め、外貨を稼ぐのがポイントだ。
- コミュニティビジネスの協働先として、大企業より中小企業がいい。DMを配るなど、企業より中小企業がいい。DMを配るなど、企業より中小企業がいい。DMを配るなど、企業より中小企業がいい。
- ビジネスに直結しないが市民農園をたくさん増やしたら定年世代が外に出てくる機会も提供できるのでは。
- 町内会をNPOにしようか、という話があったが、今のところどうもやらない。
- 内需を高め、外貨を稼ぐのがポイントだ。
- コミュニティビジネスの協働先として、大企業より中小企業がいい。DMを配るなど、企業より中小企業がいい。DMを配るなど、企業より中小企業がいい。
- ビジネスに直結しないが市民農園をたくさん増やしたら定年世代が外に出てくる機会も提供できるのでは。
- 町内会が代行することで「賃貸もいいかな」と思ってくれた人が増えれば、少しずつでも空き家が減っていくと考えて実践を始める。

4. 景観からまちをかえる。

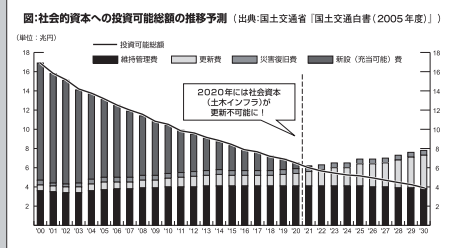
- 景観は共有財産であることと地域のひとりひとりが認識すべきである。
- 庭先が解放されている家より、閉じられた立派な家はどっちも入りやすい。
- 東洋風は、地元の人たちによりプランナーを雇っている。
- 岡崎は、景観については、何の規制もしていない(たとえば、鞍橋から西の風景、西洋風の太陽の城、その向こうは、カーネーション。対岸は、お城、マンション、ホテル)。よって家を建てる場合は、建築基準法等に規制は必要である。
- 家を建てる場合も個人の好みであり、統一したまちの景観作りは難しい。
- 町内の清掃隊のおおしごの花のボトを渡し各家庭の庭先においてもらう。
- 町内の役所で地域の環境美化について推進する会があってもよい。
- 町民が花を植え、町内での花を譲ったりあげたりすることにより、町民のつながりが生まれ、住みやすい地域となる。

5. 空き家からまちをかえる

- 住んでいるところが便利でない(車がなくて住めないようなまちは困る)。
- 老朽化した施設の維持管理費が財政の重荷になっている。今後の維持更新費用が課題。
- 住む地へ一気に子育て世代が住みはじめ、年月が経つと一気に高齢化。空き家だらけになる。この繰り返しになっているのでは?
- 都心回帰とは言いつくても先は再開発でできたマンション。高齢者もそうである。高齢者は空き家対策の担い手ではない。
- まだ体が動くうちは、地域の方とのふれあいがある場所を求めたいと思う。
- 空き家の担い手は若者では?
- 松本町でも、情報発信していないが、年に2、3件はお店をやりたいという問合せがある。自分がそういうところに住みたいと思っても、貸してくれる物件がない。賃料が大変だ。
- 昭和の薫りのするまちに憧れる若者はいる。道が狭く、建物に手をいれたいとすると、そもそも一画の敷地が狭い(100坪位)に道路の幅から必要になる。
- 50年後の岡崎のビジョンを、市民協働で考える必要がある。
- 元能見の再開発では「コミュニティを壊さない区画整理」を、松本町では「路地や文化を大切にしたい空き家対策」を始めている。
- 都市計画では、標準世帯(30代子持ち)を基本にしたまちづくりの構想が立てられている。これからのまちづくりは、高齢者と若者(20代単身)に特化した考え方が大事だ。
- 再開発マンションと空き家と路地のある既成市街地が、都心部において近接して共存するのが良いのでは?
- コミュニティを繋ぎ合わせる装置として共同の調理場があってもいい。海外ではコレクティブハウジングといって、住民が一緒に住んで食事をとり、食べる調理場と食の共同部をもつ集合住宅がある。
- 「賃貸がない家賃」は「賃貸の面倒」な場合が多い。松本町での試みは、町内会が空き家対策のビジョンをもと、計画的に住民やテナントを誘致する試み。面倒な部分は、町内会が代行することで「賃貸もいいかな」と思ってくれた人が増えれば、少しずつでも空き家が減っていくと考えて実践を始める。

6. 子どもからまちをかえる

- 大切なもの(自然や子どもの自主性)が知らないうちになくなっていく。決まっていることが多い。
- ゲームのものを否定するのではなく、他にももっとおもしろいことが世の中にあることを子どもたちに伝えることが大事。
- 自分たちが住んでいるまちそのもの(友達の家の庭、放課後の学校、神社、田んぼのあぜ道、用水路、道路)が面白かった。
- 友達や年上の子ども、年下の子ども知らない子ども、みんなで一緒に遊ぶこと、みんなで一緒にやりたいこと、できることを考え、そのために必要なルールを決める環境が今は失われている。
- 子どもを取り巻く環境として、「家庭」「学校」「地域」がある。そこに加えて、昔は「大人の知らない」子どもだけの世界、例えば、秘密基地とか、子どもたちだけの知らない遊び場が存在した。
- まずは、将来の子どもたちに何を残していくのかを考えていくことから始めていこう。



国土交通省所管の社会資本(道路、港湾、空港、公共賃貸住宅、下水道、都市計画、治水、海岸)を対象とした試算

